それは全く想定外だった。

俺は夏葉にだけは手を出さないことにしていたが、
思いもよらず夏葉の方から先に近づいてきたのだった。

初乗りの高価な外国車で浮かれていた
俺はなすがままだった。

ドキ
ドキ
ビクッ
ビクッ

その日から、夏葉は時間がある度に
俺を求めるようになった。

問題があるとすれば、彼女はいつも自分が
主導権を握ることに固執していたことだ。

フェラも、その大きな胸を活かしたパイズリも、
自分がじっとしているのが嫌だ、と正常位さえも
拒否したのである。

多分、可愛がられて育った金持ちのお嬢さんにとって
このような行為は一種のスリルと同時に
征服感を味わえるお遊戯なんだろう。

俺はそんな自分に主導権が無いセックスに
漠然とした不快感を感じているようだった。

少し叱ったほうが良いだろう。
なぜなら、そういうのは全然「ムラムラ」しないからだ。

「・・・プロデューサー、私の話聞いてる？」
「夏葉、ちょっといいか？」
「・・・？」
夏葉は俺の突然の言葉に戸惑ったが、
すぐに顔を赤らめて俺と一緒に外に出た。

「何かしら？」
夏葉の目はすでにメスの肉食動物の目つきをしていた。
怖いな…
俺はこれからの期待で膨らんだ夏葉に面と向かって言った。
「夏葉。プロデューサーと担当アイドルとの間で、こんな関係は正しくない」

「…」
「…あなたは他のアイドルにも
手を出しているのではないかしら？」
「…!?」
どうやら夏葉には俺の
「こんな関係」がバレていたようだ。
「未成年者よりは私と「する」方が
倫理的じゃないかしら？」

「もちろん私はあなたとだけ「する」から
全然構わないわ」
俺はそんな彼女の余裕が気に食わなかったのだろう。
「もし、俺が理性を失って、避妊具をつけないとか
あるいは暴力を振るったらどうするんだ？」
「プロデューサー。
私は鍛えているし腕には自信があるのよ。
もしそんなことが起きてもあなた一人くらい大丈夫よ。」

興が醒めたのか、
そう言って彼女は事務所を後にした。

数日後…

その夜は、次の放クラロケのために、
旅館へ下見をしに来た日だった。

夏葉は放クラのみんなと行くところならと、
前回のロケで買い取った浴衣を着て
無理やり俺に付いて来た。

夕食後、予想通り夏葉は
酒をちびちび飲んで
酔った振りをして、それとなく
パンツを脱ぎ始めた。
「暑くなって
きたわね…」
決断が必要な時だった。
スッ

ねえプロデューサ

しましょ？❤

プロデューサーは動かなくてもいいわよ

ハァ ドキ

ハァ ドキ

…

私が全部してあげ…

コツ

コツ

きゃ?!

スッ

ぐく

ぐ

プロデューサ?!

ブーン

ズプッ

こんな獣のような体位はだめよ！

せめてコンドームだけ…

これではまるでレ、レイプよ?!

どろ

ちゅんちゅん

プロデューサ、やめ…❤

ぴゃっ

ビク

この力は一体…全然動けない❤

嘘っ、いつもより大きい…❤

パン

パン

つづく

翌朝、帰る車の中は沈黙だけが流れた。

夏葉にそっと声をかけてみたが会話は続かず、
短い答えだけが返ってきた。

昨日はいつもより何回もイカせてしまったけど
やはり怒っているようだ。

夏葉の日頃のエネルギッシュな姿はどこかへ行き、
少し上気した表情で通りかかる風景だけを見続けていた。

俺たちは到着するや否や、誰が先とも言わずに
逃げるようにして別れた。

家へ帰った俺はふと心配に襲われた。

この状況、有栖川家に知られたらどんなことが起こるのか。

昨日は、勢いよく夏葉を押し倒し、ほとんど強引に
チンコを押し込んだが、後のことを考えていなかった。

他のアイドルたちとする時とは違い、夏葉には
「有栖川家」というとてつもないリスクがあった。

もし、ひょっとしたら、昨日のことが、
悪い方向で伝わりでもしたら、俺、いや俺だけでなく、
事務所にも大迷惑になるかも知れない。

そうなったら夏葉はもちろんアイドルのみんなに
合わせる顔がない。

欲望と両立してギリギリで築いてきた
俺のキャリアをこんなところで…。

翌日

事務所はいつもの日常だった。

ちょうど放クラのレッスンがあった日で

果穂と凛世、そして夏葉が樹里と智代子を待っていた。

いつもと違うものがあるとしたら、夏葉だった。

果穂と凛世と話をしている時も、

時々机に座っている俺をチラッと見てくる。

アイドルを辞めるなんて言い出したらどうしようか。

いや夏葉がそんなことを言うわけないとは思うが…。

針の座布団で座っているようだった。

「プロデューサー？ちょっといいかしら」

その時、先に話しかけてきたのは夏葉だった。

俺たちはできるだけ静かに目立たないように事務所の外に出た。

「一昨日は俺がやりすぎたよ。」
夏葉はじろじろと俺の目を眺めている。
やはりこんな状況は性に合わない。
「一回だけ見逃してあげる。」
「…」
「でも、次回は…。」

「いや。」
「え？」
「夏葉、やっぱり考え直したけどアイドルと
プロデューサーの関係にこういうのは良くないと思う。」
「…？プロデューサー、どういうことかしら？
じゃあアイドルをプロデューサーが強姦するのはいいの？」
「いや、それはすまないって。」
「そしてこの前にも話したようだけど、他の子達に
手を出すのはいいの？どうして私にだけそうするの…？」

元々はただ夏葉とのセックスがまるで
闇獅子に襲われるような気持ちだったので
嫌っていただけだったが、
今ではもっと現実的な理由がある。

夏葉とのセックスを続けてたら、有栖川家と何の
トラブルが起こるかわからない。
事があまり大きくなってしまう前に関係を断とう。
それが週末の間に下した俺の結論だった。

「もしかして、私が嫌いなの？」

「…？！」

「もしかして、初めて会った時の言葉を心に留めているの？」

夏葉は泣きそうな表情で俺に問い返していた。

こんな反応が出るとは思わなかった。これは良くない…

何とかしないと…。

「もしかして他の子たちは私がしてくれないことをするの？」

「…うん？」

その時、ふと俺の頭の中にある考えが浮かんだ。

「あるにはある…。」

「それは何かしら？」

「フェラとかかな…」

「フェ…？」

「オーラルセックスだよ」

夏葉はフェラチオを不衛生だと言って断っていた。
しかし、フェラは奉仕されるような感じがするし、
普段のセックスよりはましかも知れない。

それに何よりも、挿入しないなら有栖川家に
関係がばれた時もなんとか抜け道があるかもしれない。

「それをしたいの？」
「うん」
「いいわよ」
「!!」
「その代わりプロデューサーはじっとしてなさい。
私が動くから。」
「えっ、まさか今から？」

「夏葉！樹里たちが帰ってきたら俺たちを探すって。
今すぐしなくてもいいだろ。」

「いや、話が出たならすぐにしないと。」

言葉ではそう言っていたが、夏葉の顔にはいつもと
違って緊張感がありありだった。

歌とダンスはいくらでも努力できるが、
セックスは練習できないからだろうか。

考えてみると普段のセックスも少しぎこちない感じしていた。

夏葉はネットかなにかで見たことでもあるのか、
亀頭を熱心に舐め始めた。
しかし流石にこの状況はまずい。
ここは事務所の外の階段だ。
事務所から話し声が聞こえてくるほど近いこの場所で、
誰かが来たりしたら大変だ。

「あ…」

はらはらするような状況のおかげか、夏葉が舐めた
おかげか、俺のチンコはあの夜くらいに大きくなっていた。

場所を移そうと言っても聞き入れそうにないだろうし、
俺が動いて早く射精するのが上策だろう。

俺は夏葉の頭を軽く手でつかんだ。

「私が自分でするわ！」
「お、おう…」
夏葉の怒鳴り声に、俺はきまり悪く
腕を下ろすしかなかった。
カッ

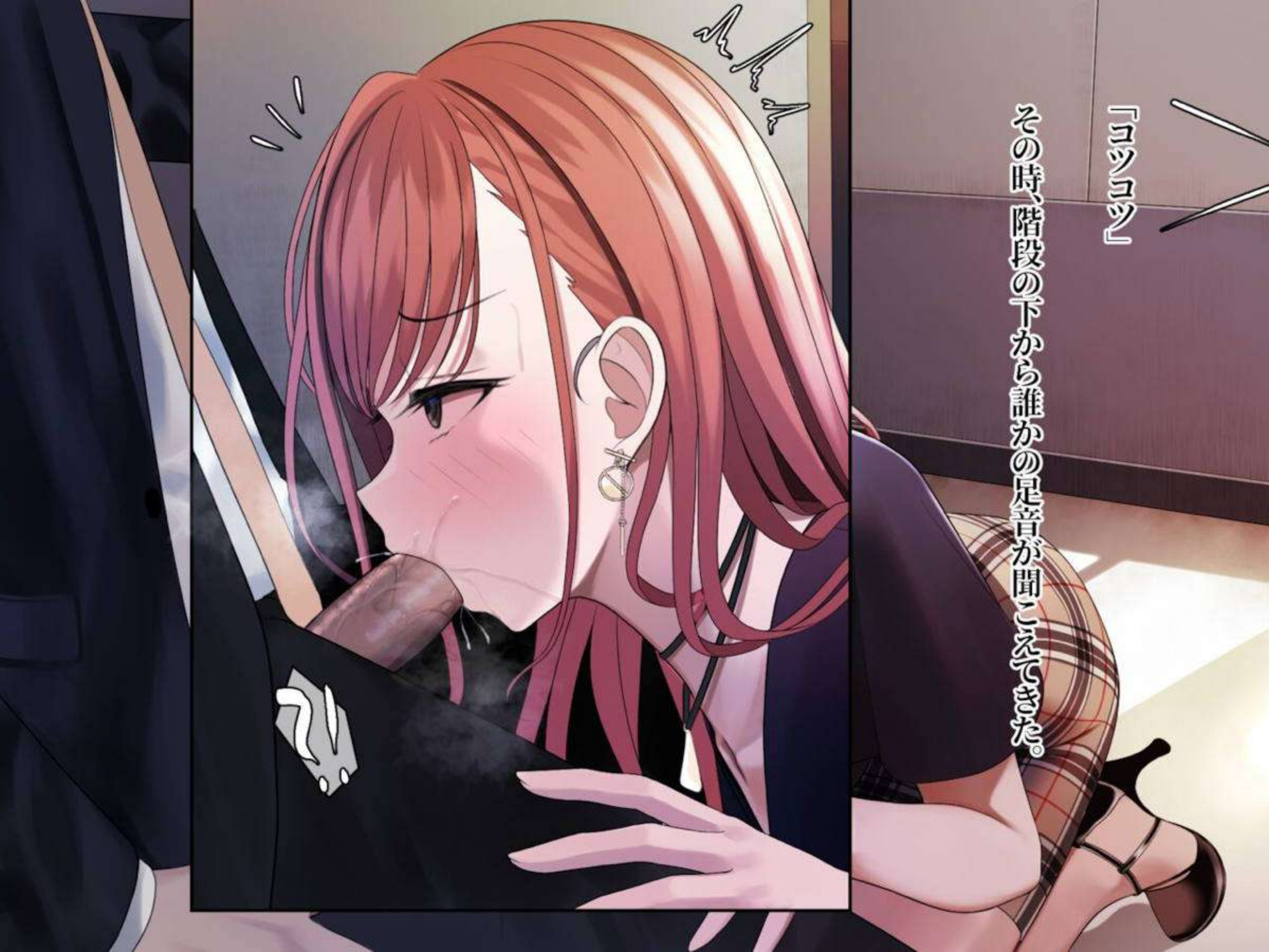
ハ？…
ア！…

夏葉は口の中にある唾を力いっぱいためて、
やっと亀頭の前部を埋めることには成功したが、
生まれて初めて嗅ぐ臭いに衝撃を受けたような顔をした。
んっ!
ハムッ
ドキ
ドキ
ビキ

「もう少し、根本まで飲み込んでくれ。」
俺は丁寧に優しく夏葉にねだった。
正直焦りもあったが、一昨日の夜のこともあったので夏葉に詰め寄ることができない。
ドキ
ドキ
ドキ

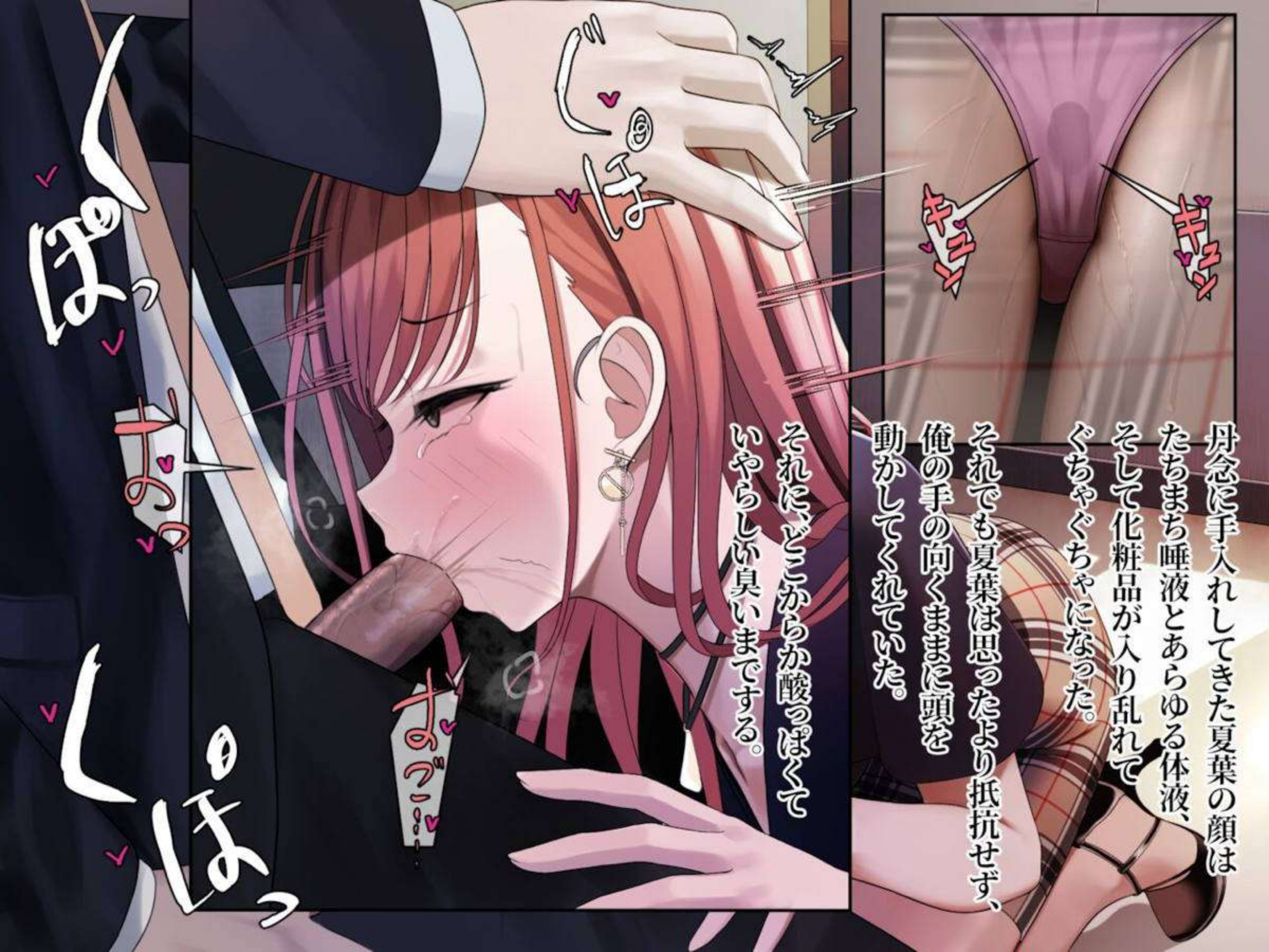
「んぷ…」
夏葉は吐き気を催しながらもゆっくり
俺のチンコを飲み込んでいく。
その唇の下にはチンコでよどんだ唾液が
下品にずり下がっていた。
罪悪感もあったが同時に、いやそのために
かなりいやらしい光景である。
しかし正直言うと物足りない。
イヤラシ
ん

夏葉のような大切に育ってきたお嬢さんが、
自分でチンコを咥えている姿はもちろん絶景だ。
けれども、その姿を見れば見るほど
俺の心の中ではむしろ強い欲望が渦巻いた。
でも、ちょうど許されたばかりなのに、ここで勝手にしたら…。


「コツコツ」
その時、階段の下から誰かの足音が聞こえてきた。

その音は、なんとか踏みとどまっていた
俺の理性をむごたらしく吹き飛ばしてしまった。
「ごめん、夏葉！」
俺は夏葉の頭をつかんで欲望に従うままに振り始めた。
ビクッ
ギュッ
んっ♡っ!!
ドキッ

ぐいっ
ボフッ
ドンッ!!


ギュン
キュン
丹念に手入れしてきた夏葉の顔は
たちまち唾液とあらゆる体液、
そして化粧品が入り乱れて
ぐちゃぐちゃになった。
それでも夏葉は思ったより抵抗せず、
俺の手の向くままに頭を
動かしてくれていた。
それに、どこからか酸っぱくて
いやらしい臭いまでする。
じゅぽ
ぽっ
ぽっ
じゅぽっ
じゅぽっ

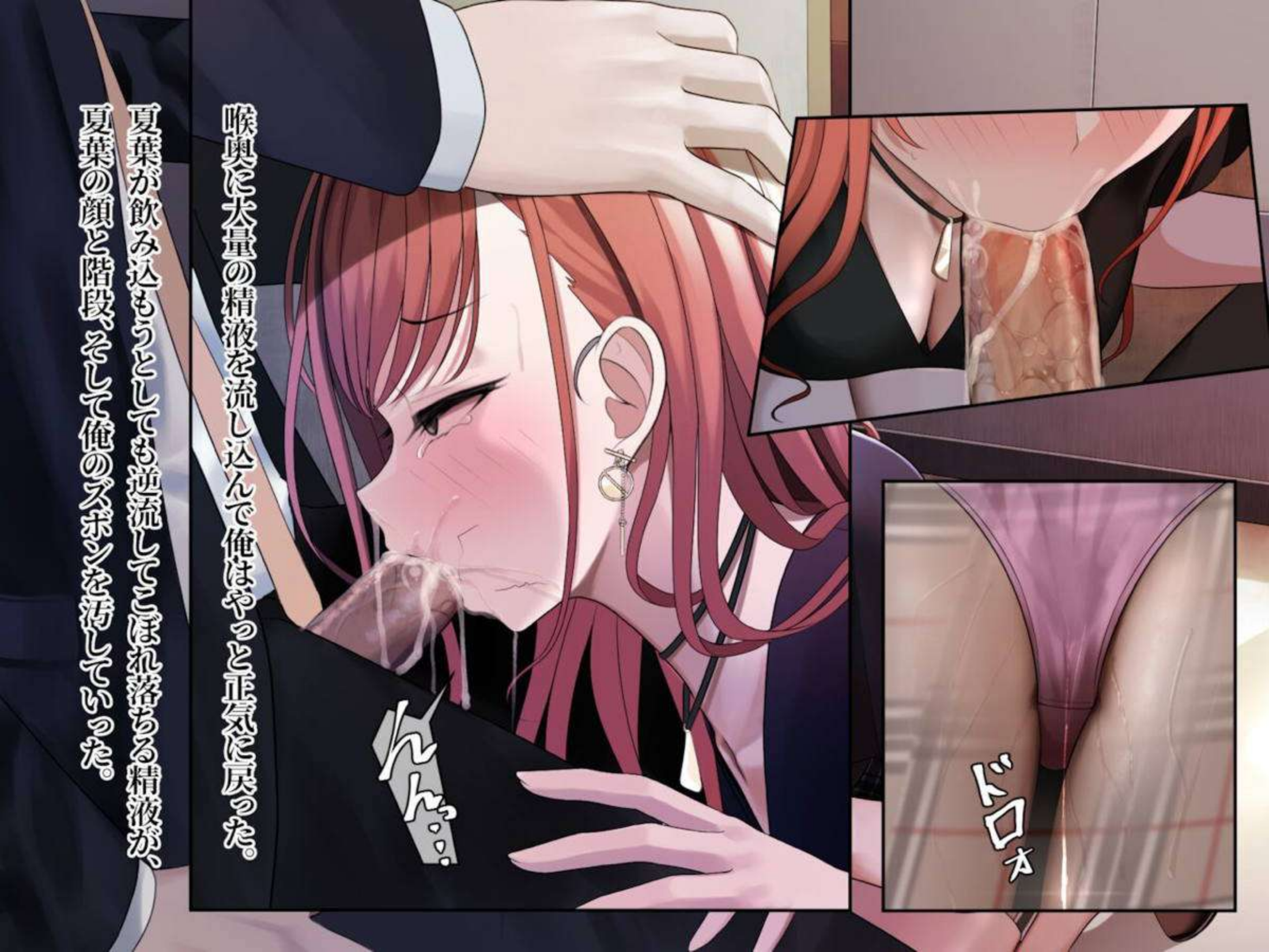
「口に出すよ。」

んっぉ!!

ハッハッ

ドキッ ドキッ ドキッ ドキッ ドキッ ドキッ

ビュビュビュビュ
ブチ
ブチ
ブチ
ぶちぶっ


喉奥に大量の精液を流し込んで俺はやっと正気に戻った。
夏葉が飲み込もうとしても逆流してこぼれ落ちる精液が、
夏葉の顔と階段、そして俺のズボンを汚していった。
んんっ…
ドロォ

夏葉は真っ赤になった顔で涙ぐんで俺を睨んでいた。
ああ、やっぱり怒ってるか。
キッ

「おはようございます！」

そんな俺を助けてくれたのは智代子の声だった。

俺たちは口論する暇もなく、
慌てて顔と周りを綺麗にして事務所に戻った。

「げっぷ」
夏葉の口からなかなか聞けない下品な声がした。
「あれ夏葉ちゃん、何か食べた？」
「い、いや……」
「お顔色が悪いようですが…、どこか悪いところでも…？」
「違…」

夏葉、そして有栖川家とのトラブルを避けるという
当初の計画は無様にも俺が彼女の口を
めちゃくちゃに犯したことで破綻してしまった。

俺の意志は俺が思っているよりもずっと弱かったのだ。

急いで綺麗にしたにもかかわらず、
夏葉が座っているソファにはねばねばした
液体がたくさん流れ落ちていた。

もしかして怒っているように見えたが彼女も
楽しんだのではないか？

こうなってしまったならついでにもっと…。

俺は自分を合理化しようと自らの欲望に
引かれてさらに深い泥沼に落ちていった。

つづく

階段での事件から数週間が過ぎた。

その後も夏葉は何度か俺にセックスを求めたが、
俺は疲れているとか、これは性癖なんだと言い訳をして、
ただフェラをさせていた。

セックスさえしなければ有栖川家に何とか
許してもらえるのではないか、という山勘を願ったのだった。

いや、もちろん許してくれるはずが
ないことを俺は知っていた。

むしろ自分の娘が信じて任せた男の
チンコを口にしてるなんて大事だ。

だからといって、どうしても夏葉との関係を
断ち切るわけにもいかなかった。

俺が拒否する素振りを見せるたびに、
夏葉はまたあの時のような寂しい顔をして、
らしくない涙声で話したからだ。

夏葉はいつの間にか俺に依存、または
執着のような反応を見せはじめていた。

しかし問題は俺にもあった。

夏葉は最初、口でチンコを咥えることさえ嫌がっていたが、
今ではイラマをさせる俺の手を受け入れるどころか、
自分で喉の奥深くまで飲み込もうとしたりもした。

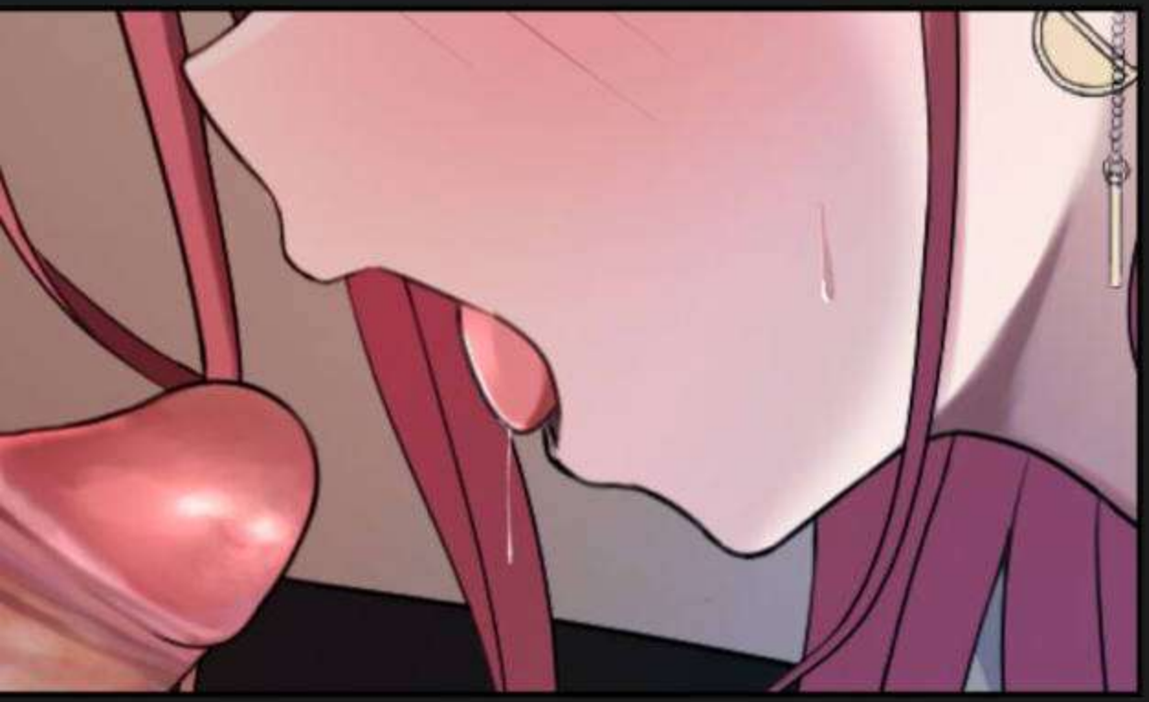
それを見て、俺は夏葉を俺の暗い欲望で染めるのに
少しずつハマっていったのだった。

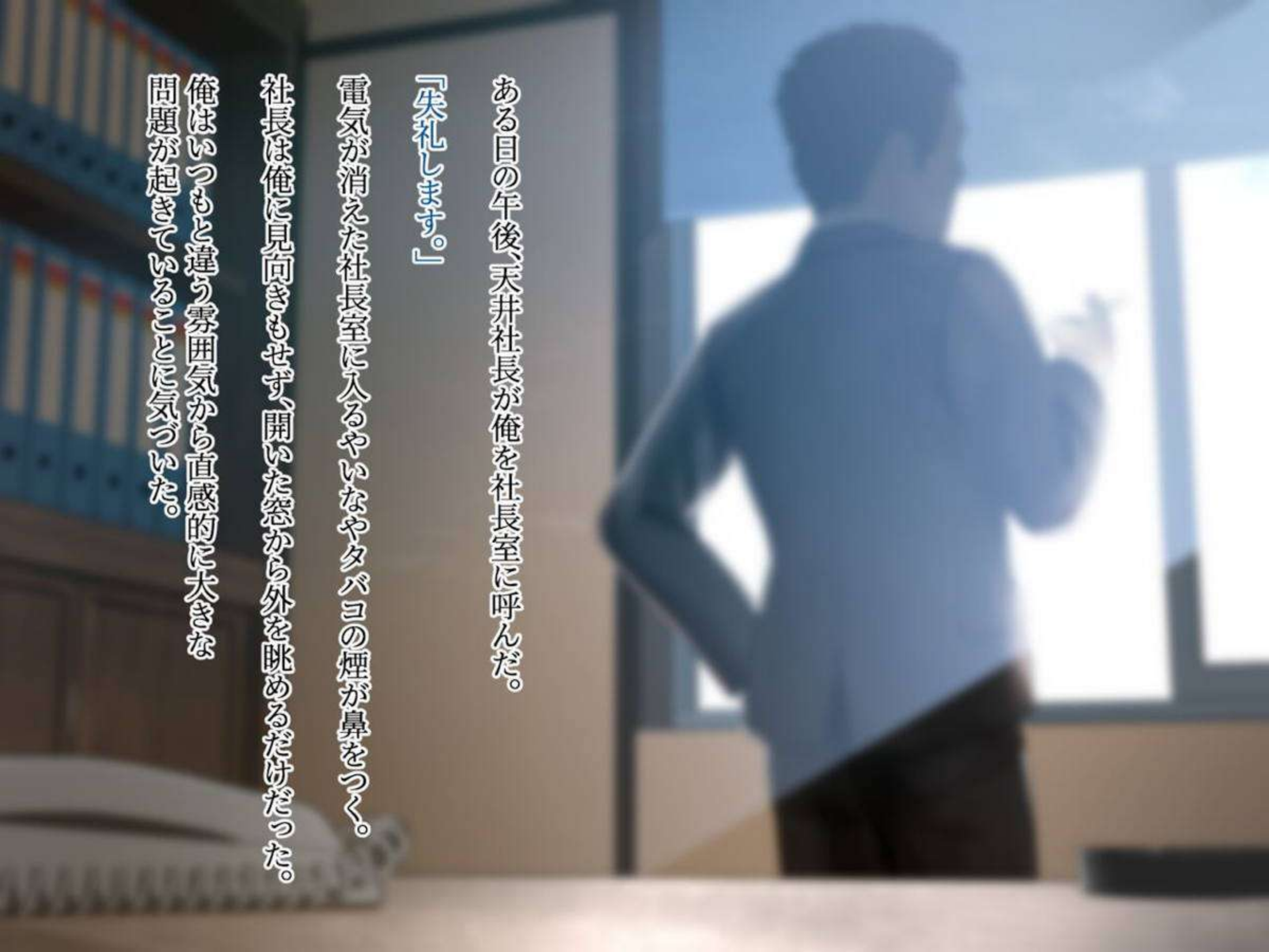
未だに有栖川家が俺たちの関係に気づかなかったことは不思議だったが、同時に少しの安堵感もあった。

考えてみれば漫画やドラマの金持ちの家でもないし、娘のプライバシーをそれほど隅から隅まで知っているはずがない。

ぎりぎりだがこのままうまく行けば大きな問題は起きないかもしれない。

俺は油断してしまったのだ。





ある日の午後、天井社長が俺を社長室に呼んだ。

「失礼します。」

電気が消えた社長室に入るやいなやタバコの煙が鼻をつく。

社長は俺に見向きもせず、開いた窓から外を眺めるだけだった。

俺はいつもと違う雰囲気から直感的に大きな

問題が起きていることに気づいた。

「お前、担当アイドルのことをどう思っている？」

「はい？」

「知らないふりをしても無駄だ。一通りは知っていたのだから」

社長の言葉はいつにも増して重かった。

「昨日の夜、突然有栖川家から電話があってな。
今までの２８３プロへの投資金を全部回収したいと。」

「投資金…？」

有栖川という名前が社長の口から出た瞬間、
胸が潰れる思いだった。だがそれよりも、
投資金というのは初耳だった。

「経営のことはお前たちが気にしないようにと
伝えていなかったが、283プロダクションは
有栖川グループのある人から投資名目で個人的な
金額をもらっていたんだ。」

「今までそのお金がなかったら危ない時期もあった。
事務所の規模に合わない大きな仕事もしばしば取れた。
アイドルたちに小さな事務所がよく経験する、
険しい仕事もさせずにすんだ。」

「社長、それは一体…」

「黙っていたのはすまないが、今回の件も私一人で
解決するためにも理由を聞いたんだ。」

「先方は理由は何も言わず、お前の安否を尋ねてきたぞ。」

「…！」

「賢いお前なら何を言っているのか分かるだろう。
出て行け…。」

俺は逃げるようにして社長室を飛び出した。

もしかして有栖川家は全て知っていたのか？

しかも有栖川家が事務所に経済的にも影響力を行使していたなんて…

多くの疑問が頭の中をかすめる。

しかし、一つ確かなことがあった。

有栖川家は、いや、正確に言えば夏葉の両親と家族は、俺が夏葉との関係を整理することを望んでいるということだ。

資金源を武器に脅迫されたことに腹は立つことが、同時に事務所のみんなに迷惑をかけてしまったという事実に罪悪感が押し寄せてきた。

今朝会った夏葉に、別に変な様子は見えなかった。

むしろ朝からフェラを自らしてくれたことを考えると、
夏葉は何も知らないに違いない。

夏葉に何の指示も、話もしなかったということは、
有栖川家はLOSTプロでアイドルを続けること
自体は許しているのか？

夏葉のアイドル活動に特段の制裁をしないなら、
俺が夏葉との関係さえ整理すれば
また支援してもらえるかもしれない…。

頭が痛い。

…

「あの、プロデューサー？」

「夏葉か。」

「何をそんなに考え込んでいるかしら？」

俺の机の前には、いつのまにか夏葉が立っていた。

「ねえプロデューサー、今晩どう？」

普段なら夏葉と二人きりになるのは熟慮しているが今は好都合だった。

夏葉との関係を整理できるかもしれない。

俺は、夏葉の妙な眼つきに違和感を覚えながらも、約束をした。

「ᩈᩣᩣ」

「パンッ」

「パンッ」

俺は下半身の激しい痛みで目が覚めた。

俺は…夏葉とバーに行って…カクテルを飲んで…

それ以来、何の覚えもない。

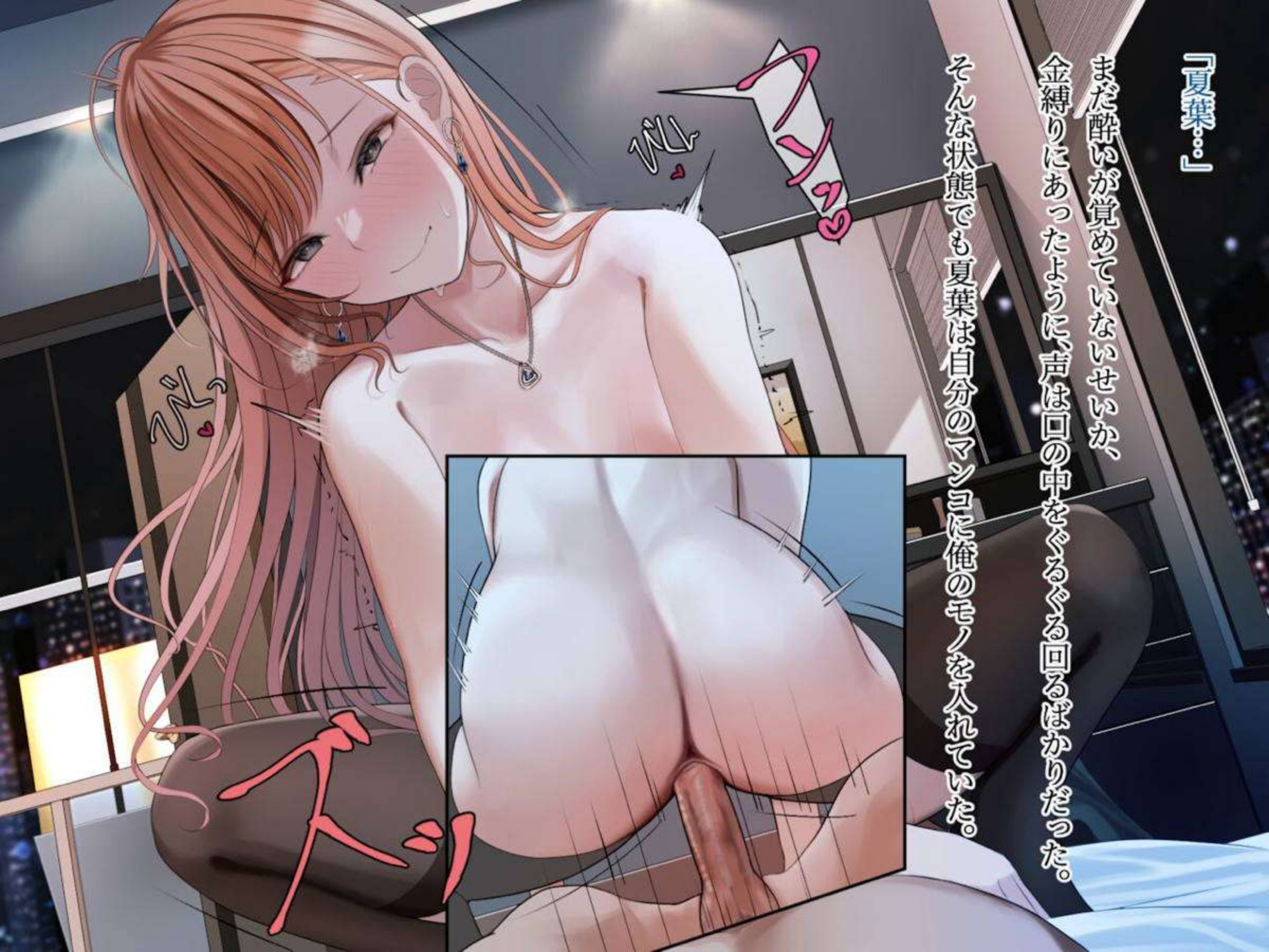
俺はぼんやりした精神をやっと捕らえた。

「あら、やっと正気に返ったわね、プロデューサー」

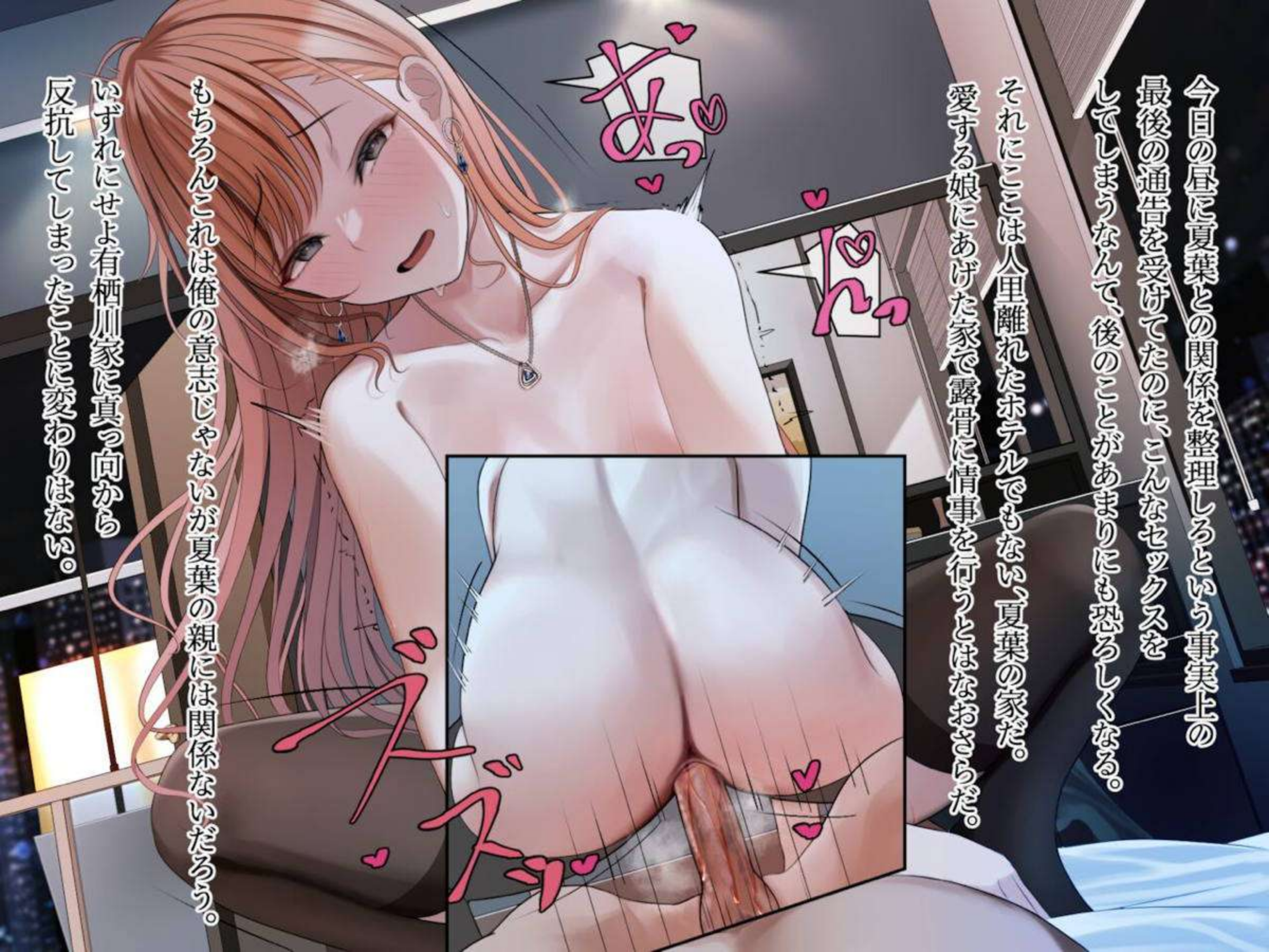
目が覚めた途端に見える光景は絶望的だった。

俺の隣で酒を飲んでいた夏葉は、
いつのまにか俺の上にまたがり、
騎乗位で挿入し終えたところだった。

夏葉はまるで雌獅子のような眼差しで、
俺を狩ろうとしていた。この前の悪夢が蘇るようだ。
しかももっと危険なことはここがホテルなんかではないことだ。
記憶が正しければ、ここは夏葉のマンションだ。
ニヤ
ドキッ
ドキッ
パンッ
パンッ


「夏葉…」
まだ酔いが覚めていないせいか、
金縛りにあったように、声は口の中をぐるぐる回るばかりだった。
そんな状態でも夏葉は自分のマンコに俺のモノを入れていた。
ぶしっ
ぶしっ
ズリ

びくっ
ぶるっ
ぶるっ


今日の昼に夏葉との関係を整理しろという事実上の
最後の通告を受けてたのに、こんなセックスを
してしまうなんて、後のことがあまりにも恐ろしくなる。
それにここは人里離れたホテルでもない、夏葉の家だ。
愛する娘にあげた家で露骨に情事を行うとはなおさらだ。
もちろんこれは俺の意志じゃないが夏葉の親には関係ないだろう。
いずれにせよ有栖川家に真っ向から
反抗してしまったことに変わりはない。
あっ
んっ
ズズッ

プロデューサー、私もう♡
俺の気持ちなどお構いなしに、
夏葉はピストンを加速していく。
んぁっ
ぁ♡
ズプ
ズプ
パン
パン

んぁ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
んぁっ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ドプ
ドプ

一瞬意識が暗転し、精液が夏葉の中に押し寄せていく。
夏葉は震えながらも、射精を終えたチンコを
挿れたまま、腰を動かし続けていた。
俺は一番危険な時に、一番危険な場所で夏葉に
中出しをしてしまったのだ。
ハァ
ハァ
もう終わりか…。
これから起こる災難を予感した俺の体は、
だんだんと冷たくなっていく。

「プロデューサー、やっぱりこういうのは嫌でしょ？」
夏葉は先程とは違ってもの静かな声で話しかけてきた。
「ロケ地に行った時、プロデューサーのモノは
ものすごく大きかったのに…
あの時の大きさも、あの時の興奮もこんな
セックスでは満たされないのね。」
この女は何を言ってるんだろう…

ハァ～